

技術進歩と教育：生成系AI

松下京平 / 滋賀大学 経済学部 教授

百周年記念企画としてのエッセイにどのような内容の原稿にしようものかと色々悩んだ結果、世間でもっぱら噂になっている生成系AIについて書くことにした。というのも、各大学から生成系AI利用に関する基本方針が打ち出される昨今の状況下で、私自身は生成系AI未利用者で、その長所・短所をそもそも理解できていないからである。この場をお借りして、生成系AIを実際に使ってみることで、その使用感を確かめるとともに、教育的観点から学生たちに何が伝えられるかについて思いつくところを書いてみようと思う。

まずは、生成系AIに尋ねる質問内容を考えることから始める。真っ先に思いついたのが、私は本学部に就職して今年で14年目になるが、彦根について自分があまりにも不勉強ということである。そこで、生成系AI（今回はChatGPT）に「彦根の魅力を教えて」と尋ねてみた（2023年6月15日現在）。すると、幾つかの回答が瞬時に提示された。まず、長閑な琵琶湖畔、現存天守の一つ彦根城、そして少し足をのばせば百名山で名高い伊吹山という素晴らしい文化・歴史・自然があるとのこと。

そんなことは当方でも知っているのですが、さらに「もう少し詳しく教えて」と食い下がってみた。すると、琵琶湖周辺の信仰の中心地である近江神宮、伝統工芸としての琵琶湖大津絵、そして彦根祇園祭なる伝統行事がある、とのこと。なるほどちゃんとあるではないかと一瞬思いかけたが、近江神宮や大津絵は彦根のものではないことに気づいた。そうであれば、一緒に紹介されている彦根祇園祭も本当に存在するのか疑わしい気がしてきた。しつこいようであるが、今一度、ChatGPTに「彦根祇園祭は本当に実在するのか?」と尋ねると、「彦根祇園祭は、滋賀県彦根市で開催される祭りです。しかし、私の知識は2021年までのものなので、それ以降は彦根市の公式ウェブサイトを確認」するようにとのことである。早速、彦根市のHPで「彦根祇園祭or 祇園祭」の足跡がないか調べるも、一致する結果は見つけられない。

そこで、今度はgoogleで「彦根祇園祭」を検索してみた。すると、トップで引っかかったのは、観光庁による外国人観光客の誘致政策に関する記事（朝日

新聞デジタル:2023年3月31日現在）で、そこでは「日本でしか味わえない体験で外国人観光客を呼び込もうという取り組みが始まる。京都の祇園祭に曳（ひ）き手として参加したり、彦根城を借り切って大名気分を味わったりと、これまで味わえなかったような体験が打ち出される…」と紹介されていた。他には、某旅行会社のHP上で京都の祇園祭と彦根城を楽しむツアーが紹介されていた。どうやら、ChatGPTはそれら情報を独自に結合し、彦根祇園祭なるものを生み出したのではなかろうかという結論に至った（私が浅学なだけで彦根祇園祭は実在している／いたかもしれない。その時は何卒ご寛恕を）。

生成系AIに要求度の高い依頼をした場合、一生懸命返答しようとする姿勢は評価するものの（取っ掛りにくい課題を出したときに、学生が諦めずにこういった姿勢で取り組んでくれると教員の立場としてはとても嬉しく思う）、出力された結果には少々注意が必要そうである。今回は、幸いにも、一瞥して返答内容が疑わしいと気づけたが、たとえばより不慣れた研究領域で生成系AIに相談した場合、自分自身が返答内容の違和感に気づけるかは甚だ疑わしい。

インターネットという巨大情報網から私たちが求める情報を瞬時に抽出する生成系AIは賢く使うとタイムパフォーマンス（いわゆるタイパ）全盛期の現代社会において有能なツールであることは確かである。生成系AIで実行可能な領域が今後飛躍的に拡大することは容易に想像できるため、個人的には積極的に活用していきたいと考えている。しかし、重要なことは、情報の真偽の判断や情報の解釈については結局のところ自分自身の責任の範疇で行わなければならない、それには相応の能力と時間が必要となる点である。タイパ重視の学生たちにとっては本末転倒な内容かもしれないが、ゼミや授業ではこの点を強調して伝えて行きたいと思う次第である。